

## 要旨

本稿では、かつて石炭産業が栄えた夕張市にある、旧夕張市美術館収蔵コレクションの鑑賞を通じて、鑑賞者自身がどのように想起や回想をし、意味づけをするのかを、社会文化的側面を含めてナラティブによって明らかにすることを学術的目的とした。また、その意味づけされたことを通じて、コレクションの一部が産業遺産に類するものであること考慮して、展示価値を明らかにすることとした。

旧夕張市美術館は1979年に開館し、2012年に閉館になるまで、30年以上運営されており、その間作品数約500点が収集されている。作品の作家は、夕張市内で暮らした人やゆかりの人が多く、大半を絵画が占めている。元来ミュージアムは調査研究することで、資料に学術的・社会的価値を見いだすのだが、夕張市においては美術館が閉館後、コレクションの価値について研究され、広く人々に共有される機会は少なく、収蔵庫に残され埋没しつつあった。このような背景から、価値を考えることに着想を得ている。

コレクションが持つ価値のうち本稿における展示価値は、鑑賞を契機に鑑賞者にとっての意味が生成されるという価値として限定して捉える。鑑賞者は、鑑賞を通じて多様な影響を受けたり得られるものがあるが、そのほとんどが目に見えないもので容易には捉えられない。したがって、鑑賞後に面談し、その鑑賞の経験と鑑賞者の経験などをむすびつけて、もの語ることで、鑑賞者にとっての意味づけを捉えることとしたのである。

調査の結果、鑑賞者の意味づけは15項目あることがわかった。それは次のとおりである。回想することで意味づけられたこととして、(1)ふるさとほどどこまでいってもふるさと、(2)まちの変化を捉え想いをもつこと、(3)表現されていない地域や時期へ想いをもつこと、(4)家族だからわかる痛みや苦勞と家族への誇りをもつこと、(5)自身の拠り所を確かめること、(6)かつての美術館を振り返り現在に紡ぐこと、(7)日常の視点から比較することで勇気づけられること、寄り添うことで意味づけられたこととして、(8)旧産炭地の歴史を現在に紡ぐこと、(9)過去に生きた人々の歩みを察すること、(10)盛者必衰・栄枯盛衰を知ること、文化活動やアートとして意味づけられたこととして、(11)生きて描かれたものだから観てあげること、(12)周りを見て落ち着くこと、(13)人や世界のことを想像し未来へ向かうこと、(14)感動すること魂を呼び起こすこと、(15)見るだけでいいということ、以上である。

さらに、このコレクションが産業遺産に類するものであると捉えると「石炭産業とそれに翻弄された激動の町の運命を知り、それでもその中を生き抜いた人々の困難な歩みを察すること」という意味づけがなされると解釈もできた。

また、このコレクションが、産炭地の歴史と記憶を現在に伝え、人々が過去と現在の地域の姿や人々の姿に想いを馳せることのできる、人々を癒し励まし勇気づけ、内省も促す存在として地域社会に位置づけられることが明らかとなった。これによって、今後のコレクションのマネジメントや継承の礎となる研究となった。